



中国河北省北部における 草地の荒廃とその対策

畜産草地区 放牧管理研究室

梨木 守

NASHIKI, Mamoru



中国の北京、天津など都市部では、ここ数年、春に北部に端を発する黄砂が偏西風に乗って激しく吹き寄せ、人の健康に害を及ぼし、社会的な問題となっています。その原因の一つに、改革開放政策による国营農地や家畜の個人経営化、自由経済化が推進され家畜の飼養頭数が増加し、過放牧等による草原の植生の衰退、裸地化を招いていることが指摘されています。今回、中国農業大学から招聘を受け、03年8月25日～31日にかけて河北省、内蒙古の草原植生を実態調査する機会を得ました。

《中国の河北省北、内蒙古の衰退草原の実態》

08年のオリンピックに向けて各所で道路、ビル建設ラッシュと車渋滞・クラクションの喧噪の北京から北に600km、張家口（チャンジャコウ）経由で錫林浩特（シーリンホト）の草原を目指しました。最新の北京近郊の高速道路、直線に伸びる一般道をドライバー超氏のよく言えばキレよく操る中国寡占車VolksW.1.600ccに身を委ね、車窓の羊らの群（写真1）も吹っ飛ばす猛スピードで走り続けること8時間、そこには羊草（*Aneurolepidium chinense*, *Stipa*, *Agropyron*, *Artemisia*）等の植生からなる広大な草原が広がっていました（写真2）。そこでは家畜が採食しない植物群落の出現も



写真1：羊、山羊の放牧風景

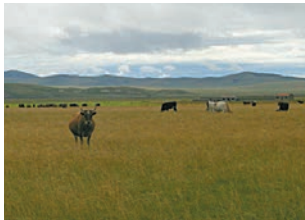


写真2：草原の牛



写真3：家畜忌避植物
(*Achnatherum splendens*)

増加し問題化しているとの説明を受けました（写真3）。次の日に訪れた錫林郭勒（シーリングール）では、バッタにより被害を受けた草原（写真4、5）が延々と続いていました。被害が拡大し続けるため、大学と中国科学院の研究機関が共同して現地に対策基地（写真6）までも設けその対策に取り組んでいることに、バッタ被害の深刻さを認識させられました。

張家口にある沽源国营農場（26,700ha）では、政府から植生回復すべき草地の面積が割り当てられ、家畜が嫌う *Iris* 属植物などが繁茂した草原を元の植生に回復するため、中国農業大学の30歳代の気鋭の研究員が駐在し、数年間の休牧、

優良草種の追播などの対策を指導していました。その一方で国营農場に隣接する放牧に制限のない草原は、明らかに過放牧状態となっていました。現地において各農家に対して、草原の面積・草量に応じた頭数の放牧に改めることが重要で、草原の過放牧回避の徹底を図るよう行政担当者に指導しました。ただ、当地には遊牧の伝統もあり放牧方式の変更は容易でないようです。

《草原研究者》

最終日には草原研究者を目指す大学生20名を相手に東北の草地利用をテーマに講演しました。彼らから日本の預託料を払って牛を放牧する公共草地のシステムに関して質問責めにあいました。また大学・研究者と草原の利用実態調査の緊要性について意見交換しました。中国の草原利用、保全に対する取り組みは、第一線で働く若手研究者の熱意を込めた説明や大学生の真摯な聴講姿勢に近い将来、成功することは間違いないと確信しました。

最後に、中国では乳製品の消費が急激に拡大し、外国メーカーとの合弁企業も生まれ、生乳、ヨーグルトなど中国の人々の好みにあわせた商品が開発されています（写真7）。草原の維持は黄砂の対策だけでなく、中国の畜産にも一層重要なものになると考えられます。



写真4：バッタに喰われ裸地が目立つ草原（この裸地が黄砂を生む）



写真5：草原を喰い尽くすバッタ



写真6：中国科学院の内蒙古草原生態研究所



写真7：中・蒙合弁会社の牛乳（於：北京市内の食堂）